

女性のための情報誌

NETWORK

NO. 17



目次

知事巻頭インタビュー	2
特集 自分らしく今を生きる	4
◇苦しみを喜びにかえて	6
ウーマンスクランブル	10
グループ紹介	12
国際交流のひろば	13
ねっとわあく らいぶらりい	14
ポプリ	15
編集員紹介	16

魅力ある女性に なっただけほしいね

鈴木和 よろしくお願ひします。今回は、知事さんの二回目の登場ということで、一人の男性としての立場でも、率直なご意見をうかがいたいと思います。

早速ですが、いま女性の社会参加が進み、職場やボランティア活動など様々な分野で女性の活躍がみられますが、このような現状に対してどのようにお考えですか。

知事 それは本当にいいことだと思いますね。世界的にみても、平等ということは普遍的になっているね。日本は若干遅れて、男女同権は戦後だね。「国際婦人の十年」で、あえ



て取り上げなければならぬほど、女性の地位が男性に比べて正しく位置づけられていなかった。今、男も女も同じだということが、ようやく法制度の整備など、環境だけではないところかな。結構なことだと思いますよ。言葉だけは結構だといえるけれども、なかなか同じ扱いという環境づくりが、日本はまだ下手だね。意識しすぎて、日本の場合は女性を大事にしすぎる面もあるんじゃないかな(笑)。大事にしてちょうどいいくらいかな(笑)。もう少し女性が社会観も、家庭観も、人生観も諸般すべてにおいて「男性に負けないぞ」とか「私にもやれるわよ」とか、そういうことが自然にできてくれればね。それを期待します。いちいち手を差し延べなくても、一緒に肩を組んで歩けるという環境、意識しなくても自然に男性から「お先にどうぞ」という言葉がでるといふ雰囲気になって、初めて本当の意味の男女平等ということになるかな。

須山 私も古いタイプの人間なのかも知れませんが、いくら男女平等になったとしても、やはり男性には持つていてほしい部分とか、女性として失いたくない部分があるのですが、知事さんはいかがですか。もしおありとすれば、どのようなことでしょうか。

知事 それは「らしさ」。男らしさ、女性らしさという「らしさ」を失ってほしくないんだな。人間本来的に男と女というものは、ものの方や考え方、体そのものが違うのだから、「社会性の中で一緒」ということは分かるけれども、「らしさ」を失ってきて、男が女みたい、女が男みたいになってしまうことは、私はあまり感心しないように思うね。それぞれが自分の特性を大事にすることも必要だ。「らしさ」を失わないということを前提とした意味での平等が必要じゃないかな。

私もボタンをつけることくらいは自分でやりますよ(笑)。男がやるから偉いということじゃなく、男・女にかかわらず必要なことを自分でやるということですよ。

鈴木三 いま、余暇を大切にしようといわれています。日本人は余暇の取り方が下手だとよくいわれますが、知事さんはどう思われますか。

知事 本当にそう思います。私自身も余暇の使い方をどうしているのかまだ分からない(笑)。余暇の使い方がよく分からないこと、残念だけれども、まだ社会環境がそこまでいいっていない。余暇があれば家族で行くとか、夫婦で出かけるとか、皆さんで行くとかという、余暇を過ごす場所が整備されていないね。人間本来的には、働くこと、休養すること、人生をエンジョイすること、人間的な環境づくりを考えると、そこら本當の余暇が生まれると思いますね。遊びということも意義がある。人生をエンジョイできる余

暇ならば素晴らしいことだと思う。大分以前にアメリカ・ヨーロッパへ目的を持たないで旅行したことがある。アメリカでは、家族ぐるみで車を使って長期の休暇を取りながら余暇を過ごしていた。キャンピングカーで御主人と、子供をつれて一週間か十日くらい、毎年出かけるようなのが本当のレジャーというか。それがやっぱり社会性や人生観の違いなのかも知れないけどもね。これからはその点でも、女性の方々は強くアピールしてもらわなくては。男だけのせいだなんて思われたら困るからね(笑)。

新井 今のお話の中で、余暇の使い方として家庭に目を向けるということがありました。より良い家族のあり方についてはどのようにお考えですか。

知事 私たちは結婚して何十年だけれども、空気や水みたいなもので、居ても居なくても自然になつて。それでいて、ちゃんと居なければ困るっていうような、そういう自然の雰囲気になるまでがなかなか大変だけどね。

相手に対する思いやりだろうと思いますよ。人間としてお互いに思いやること。それで、私が一番いいと思うのは、言葉の掛け合い。

夫婦でも、親子兄弟でも、それがまずスタートだと思えますね。家庭でも社会でも、そういうことから雰囲気醸成されてくるのだと思いますね。難しく考えなくて、相手の存在を認めれば、思いやりが自然に出てきますからね。他人同士でもそうだよ。さり気なく言葉を交わし合うことによって、仲違いしていたのがいつの間にか解けている...と思います

すね。

萩原 知事さんは、夫婦円満の秘訣は何だと思われませんか。

知事 円満ということは、喧嘩しないということですよ。喧嘩ばかりでも困るけれども、円満すぎても困る。時々はずねたり、焼きもちをやくということが大事(笑)。それが刺激だね。あんまり焼きすぎると焦げるから、程々でいいの(笑)。お料理でも、隠し味で塩をちよっと落とせば、砂糖の味が違うというよなもの、夫婦でも、塩を落とすような、そういうものが普段の生活の中にあればよろしいですよ。あんまり円満と言うのは、飽きちゃうよ。うまい饅頭ばかり食べたたら飽きる。たまに塩をなめるくらいがちょうどいい。何を言っても「あつ、そお」では面白くない(笑)。



土屋 今回の特集では、いろいろな困難を乗り越えて活躍されている方々を取り上げましたが、知事さんから女性たちへのエールをお願いします。

知事 魅力ある女性になってほしい。やはり女性は女性としての個性を生かすということかな。それで、男性と堂々と渡り合える、意思表示ができて対等に何でもできるといふ、そういう意味の女性の魅力、それを期待しています。女性としての魅力、個性を大事にすること、本来の意味の男と女の役割ということを調和させることによって、権利、義務も自ずから生まれてくると思いますね。だから立場は違っても、社会的責任と言うものは一緒でなくちゃならないね。

やっぱり勉強することですよ。ひとよりよけいに物を見たり、読んだり、お付き合いをしたり。家庭も大事だけれども、社会に出て見聞をひろめる。それによっていい意味での違いが出てくる。それを私は期待したい。勉強をしようと思えばいくらでもできるけれど、勉強というと肩肘はっちゃうから、平常心で自然に吸収すると言う心構えだけは、日常持つていけばいいんじゃないかな。さり気なく醸し出される雰囲気と言うものがあるでしょ。いい意味での違いが感じとれるさり気なさが大事だよ。味わいがあるということだな。

さりげなく男性を愛してやってください(笑)。
* 公的な立場ではなく、素敵なひとりの男性として、ざっくばらんにインタビューに応じてくださった知事さん。ユーモアと温かさにも包まれたひとときでした。

自分らしく今を生きる

理想の花を高くかかげ、それをより美しく咲かせてみませんか

特別寄稿 毎日が自分育て

実践女子大学助教授

佐藤綾子



大変正直なところを申しあげるならば、私はこの頃女性たちと話してふと

（この人はもしかしたら自分の人生が二度あると思っているのではないかしら）

と疑問に思うことがある。

いわく、

「今の仕事も悪くはないのですが、もっと別の可能性がありそうな気がして・・・」

「毎日家のことをやっていますが、それはそれで忙しいのですが、もっと別の面白い人生があるのではないかと不満なのです。」

冗談ではない。私自身子供時代は超病弱児だった上に貧乏で、要するに人より優れた条件など何ひとつなかった。では、あったものは何か？ それはただひとつ、「どんな小さな能力でもよい。カケラでもよいから何かひとつ自分の個性の長所となり、しかも他の人のお役にも立つ能力のタネ、才能の微粒子ほどのもの、体力のひとつか、人脈のたった一人、そんな小さな小さな「力」のモト」を見つけたら、トコトンそれを鍛え、育て、大きくしてやるゾ」

という燃えるような想い、熱望

がたぎっていた、ということだろう。その熱意だけが頼りで、現在も誰も言いもしなかった「パフォーマンス論（個人の日常の美的自己表現）」をひっさげて、一人で突っ走っている。1980年以來お蔭様でやっと単語も日本中の大半の人々に認知され、著書も10年間で41冊になった。

「そんな考え方はシャイな日本人の気質に合わないから流行りっこないよ」という悪口や無視の中で、脇目もふらずこの道一筋、リサーチと理論の構築と日本中への拡大を目指して闘ってきた。今日も明日もそうするだろう。

特別の才能や体力があつたわけでも何でもない。ただ、熱意があつた。ひとつのことをやりながら心のもう片方で「もっと別の可能性もあるのよ」などと言訳したり、ましてそのことを逃げ道にして毎日をごさすような生き方はしなかった。人間不思議なものだ。

「これしかない。これを全力でやる。これに賭けて生きる。」

というほどの想いがあれば、必ずそのことを成し遂げるためのノウハウはどこかで見つかる。そのコトを成すまでは神様は自分を殺したまわれない、と念じていれば死力が尽くせる。まわりの人もやが

ては助けて下さるだろう。

だから、「もっと別の道があるかも」と思う人は、やってみたらいい。ただしそれには条件がある。今居るその場所、その空間、その人間関係の中でベストを尽くし

きること。その作業を終わった人だけが、次の道でも成功するに違いないと私はいつも思っている。分かりやすく言うならば、私たちが何かを「できない」と言うとき、それがはたして「できない」

なのか「しない」のかをよくよく見極める必要があるだろうということ。つまり、本当は自分には大

したヤル気もなく、従つてそのことを外的なさまざまな悪条件のせいにして日々を過去へ過去へと流し去っているために何もしない(don't)のか、針の先ほどの可能性で片っ端から試して全力を尽くしたけれど力不足でできない(can't)なのか。この両者の間には、似て非なる大きな距離がある。

さて、私が今この誌上で心をこめて呼びかけ、もしも何かのお役に立てるならば何でもしたい、と心に決めている人々はこの後者のタイプである。

何かをしたいのなら、まずそれを念ずること。そしてその目的

を果たすために自分にはいったいどんな能力があるのかを徹底的に分析し、一覧表にする。これが私が「自分育てのすすめ」(1983年講談社単行本刊行、1988年講談社文庫)の中で書いた自己評価一覧表のすすめでもある。

たとえばワープロは一分間に何文字打てるのか。英検は何級か。判断力はありかなしか。暗記力はどうか。体力はどのくらいか。思考力はどうか。など、まるで車の車検顔負けの自己分析を一覧表にしてみる。そうすると自分ではボンヤリとしつかめていなかった自

画像がくつきりと浮かび上がってくる。どこが欠けていてどこが長所か。それを見極めたら、さあ、もう迷うことはない。一目散に「自分育て」の開始だ。少しでも可能性のある分野で最大限自分を鍛え、大きく育て、そしてそのプロセスを日々楽しんでほしい。

人生は一度しかない。その一度きりのステージをめいっぱい大きく使って、自分の可能性を開花すること。それは、生まれてきた者の権利であり、だからこそそれをせずに死んでゆくのはいかにももつたない、と私は思う。

プロフィール

- 1947年 長野県生まれ
- 1969年 信州大学教育学部卒業
- 1979年 上智大学大学院博士課程に在籍のままニューヨーク大学大学院パフォーマンス研究学部修士課程入学。
- 1980年 同大学院卒業。

日本に初めて「日常生活における自己表現」の意味での「パフォーマンス」の語を導入。以後「パフォーマンス理論」の構築と人材教育での実践の道を歩み続けている。

主な著書

- 愛して学んで仕事して
- すてきな女の愛と人生の選択
- 経営パフォーマンスの時代
- 愛され方の上手い女性 下手な女性

